

文學の森

Kitakyushu Literature Museum News

第12号

2012年10月1日発行

市制五〇周年を前に

館長 今川 英子

東洋一のつり橋といわれた若戸大橋が開通して五〇年が経ちました。家族で渡り初めをした時の記念写真が残っています。

来年二月一〇日は北九州市制五〇周年。五市が合併したとき、街が大きく立派になると、子ども心に誇らしく思つたものです。それから新幹線が開通し、東京オリンピック。プラスバンド仲間のトランペット奏者が、あのファンファーレをとても上手にそしてちょっと得意げに吹いていたことを想い出します。

さてこの秋から来年にかけて、市制五〇周年を記念して、特別企画「働き、書いたー北九州の職場雑誌展」を開催します。

明治末から交通の要衝、鉄と石炭の重工業都市として日本の近代国家を牽引してきた北九州には、人・もの・情報が重層して行き交う独特的の文芸文化が育まれました。その一端を担うのが職場雑誌です。

「ものづくりの街」としての発展を支えた働く人々によつて作られた社内報や広報誌、サークル誌などなど。職場の繋がりを括りとして刊行された雑誌の変遷を、歴史的にみてゆこうというものです。

はじまりは大正期に遡りますが、最も盛んに発行されたのは一九五〇年代から六〇年代、戦後復興期から高度成長期にかけての時代です。創刊の辞や編集後記には、戦後の混乱から立ち上がり未来へ前進しよ



宗左近書

(1919-2006 詩人、評論家、
仏文学者。戸畠区出身)

うと、人間的理想に裏打ちされた生活者としての希求や抱負が力強く綴られています。精神の渴きを満たし、「文化と教養と、生活の向上」(門鉄文化創刊号)を目指そうと、まさに文学を糧として、今日より明日、明日より明後日と未来への希望を確実に信じて生きた時代の、若々しい息吹が伝わります。これらの職場雑誌から小説家、詩人、俳人、歌人、評論家が巣立つていきますが、現在でも北九州から様々な分野で活躍する多くの文学者が輩出するのは、このような文芸活動における層の厚みが風土としてあるからに相違ありません。

職場雑誌が盛んな時代をノスタルジックに懐古するのみでなく、今と未来を考える糸口になつていただければと思います。ところで今年は森鷗外生誕一五〇年でもあります。記念のシンポジウムや講演会を企画していますが、五〇年前は一〇〇歳、生きていってもそれほどおかしくはなかつた時代だったのかと不思議な感にうたれます。

○ 市制五〇周年を前に	1	○ 佐木隆三名誉館長と学ぼう！こどもペンクラブ	5
○ 第11回特別企画展 没後50年記念読み継がれる吉川英治文学 一巖流島決闘から400年一	2	○ 資料紹介 杉田久女画賛幅・若山牧水書簡	
○ 開会記念 吉川英明さん講話 「武蔵から新・平家へ一英治が描いた幸せとはー」	3	○ 五味太郎作品展【絵本の時間】	6
○ 映画「宮本武蔵 巖流島の決斗」上映会		○ 穂積保さんギャラリートーク	
○ 指方恭一郎さん講演会 吉川英治『親鸞』と『宮本武蔵』—その共通する人間観	4	○ 「●●が逃げた？」カラーインクで絵本を作ろう！	7
○ 北州市民カレッジ「没後50年 読み継がれる吉川英治」		○ 絵本のよみきかせ	
		○ 働き、書いたー北九州の職場雑誌展	8
		○ 資料寄贈者・提供者・受贈雑誌一覧	



吉川英治文学
—巖流島決闘から400年—
平成24年4月21日(土)～7月1日(日)



開会式の様子。テープカットは右から阿部照子さん、岩見利男二天一流宗家、吉川英明吉川英治記念館館長、指方恭一郎さん、今川英子館長

三 吉川文学の世界Ⅱ 「宮本武蔵」「三国志」「新・平家物語」を中心とした作家へ

川柳作家としてスタートした吉川英治の前半生。吉川英治を名乗る以前、一冊の雑誌に六つのペンネームを使い分けて掲載したという驚きの資料や「神州天馬俠」「鳴門秘帖」など初期の代表作原稿をご覧頂きました。

この他、机、座椅子、手あぶり、筆記具など、実際に使用された

若い頃から苦労し、独力で大作となつた吉川英治は多くの箴言を残しています。座右の銘として知られる「我以外皆我師」など、市井への信頼や家族への愛情を示す言葉を趣深い書画で紹介しました。

一 広がり行く吉川文学 映画、舞台、テレビ、漫画とさまざまなメディアで展開された吉川文学を紹介。吉川英治原作とは知らずに触れていた作品の数々を実感して頂きました。井上雄彦による人気漫画「バガボンド」の原稿も展示。

二 吉川文学の世界Ⅰ 投稿家から作家へ

九州が描かれることになります。「宮本武蔵」最終回原稿を始め、ゆかりの資料から北九州における吉川英治の足跡をたどりました。

五 吉川英治のことば 幼い頃から苦労し、独力で大作となつた吉川英治は多くの箴言を残しています。座右の銘として知られる「我以外皆我師」など、市井への信頼や家族への愛情を示す言葉を趣深い書画で紹介しました。

●構成
一 広がり行く吉川文学
映画、舞台、テレビ、漫画とさまざまなメディアで展開された吉川文学を紹介。吉川英治原作とは知らずに触れていた作品の数々を実感して頂きました。井上雄彦による人気漫画「バガボンド」の原稿も展示。

九州が描かれることになります。「宮本武蔵」最終回原稿を始め、ゆかりの資料から北九州における吉川英治の足跡をたどりました。

吉川英治は、二度にわたり北九州を訪れています。最初は昭和12年、「宮本武蔵」執筆のため二度目は昭和25年、「新・平家物語」の取材です。両作品ではそれぞれのクライマックスに北九州が描かれることになります。「宮本武蔵」最終回原稿を始め、ゆかりの資料から北九州における吉川英治の足跡をたどりました。

四 吉川文学の世界Ⅲ 北九州・福岡と吉川英治

吉川英治は、二度にわたり北九州を訪れています。最初は昭和12年、「宮本武蔵」執筆のため二度目は昭和25年、「新・平家物語」の取材です。両作品ではそれぞれのクライマックスに北九州が描かれることになります。「宮本武蔵」最終回原稿を始め、ゆかりの資料から北九州における吉川英治の足跡をたどりました。

吉川自身の転機ともなった「宮本武蔵」のほか、「三国志」「新・平家物語」など代表作の世界をさまざまな資料から紹介しました。のち、「三国志」執筆の契機となつたペン部隊従軍の内訳には有名作家の署名がズラリ。

吉川自身の転機ともなった「宮本武蔵」のほか、「三国志」「新・平家物語」など代表作の世界をさまざまな資料から紹介しました。のち、「三国志」執筆の契機となつたペン部隊従軍の内訳には有名作家の署名がズラリ。

本展開催に関しましては、吉川英治記念館の全面的なご協力に与りました。記して厚くお礼申し上げます。

展示資料約250点

来館者の声
◆吉川英治さんの「宮本武蔵」の文に何度も元気をいただいています。今回、原稿等が見られてすごく嬉しかったです。
(20代・女性)

◆吉川英治という作家の人生、生き方を知ることができ、別の観点からの吉川文学に対する興味をもつた。
(40代・男性)

いた遺愛の品から、書斎の雰囲気を再現。大作執筆の場を感じて頂きました。また、書画骨董にも深い造詣を持つ吉川の旧蔵品から宮本武蔵直筆の書簡を展示しました。武蔵研究の面からも第一級の史料ということです。

吉川自身の転機ともなった「宮本武蔵」のほか、「三国志」「新・平家物語」など代表作の世界をさまざまな資料から紹介しました。のち、「三国志」執筆の契機となつたペン部隊従軍の内訳には有名作家の署名がズラリ。

吉川自身の転機ともなった「宮本武蔵」のほか、「三国志」「新・平家物語」など代表作の世界をさまざまな資料から紹介しました。のち、「三国志」執筆の契機となつたペン部隊従軍の内訳には有名作家の署名がズラリ。

吉川英明さん講話

「武藏から新・平家へ
—英治が描いた幸せとは—」

平成24年4月21日

吉川英治のご長男で吉川英治記念館館長の作家吉川英明さんにご講話頂きました。

＊＊＊



吉川 英明さん

「宮本武蔵」の読者から、英治自身が武蔵のような人なのか、と度々問われました。確かに、私が子供の頃は非常に激しい性

で厳しい人でした。(略)次第に温かになりましたが、一度これは武蔵を地でいつたな、ということがありました。背中に悪性のヨウができた時です。これは、下手をすると命取りになるといわれる腫瘍で、周りの方も早く处置した方がいい、と言つてくれます。ところが、「俺はこれを自分で治す」とがんとして医者にかかります。だんだん大きくなり、仰向けに寝られません。そ

れでも病院に行かない。ところ

が、それを地で行つたな、と驚い

て見ておりました。

しかし、英治が人間は武蔵の

ように強い信念を持つて生きる

のが理想の生き方だと考えてい

たかと言えば、私はそうでもな

いと思います。例えば「宮本武

蔵」を書く少し前の「松のや露

八」。露八は武家の高い身分に生

まれながら酒と女に身を持ち崩

し、轡間となる実在の人物です。

吉川英治はこうした生き方を決

して否定しません。これは「宮本

武蔵」では本位田又八にあたり

ます。何をやつても中途半端な

制作された「宮本武蔵」は、時

代劇の東映が勃興を前に

熱い思いを賭けて生んだ作品で

す。

内田吐夢監督は、撮影にあたり俳優、スタッフらを集め、五

年間、自分も含め皆で成長して

いこう、と呼びかけたと言いま

す。特に主演の中村錦之助はス

トイツな武蔵の芯をつかむことで、役者としても大成しました。

また、お通を演じた入江若

と夫婦になります。しかし英治

は、子どもを抱えたこの夫婦の姿を「幸せ」として描いています。

これもまた人の幸せである、と。

こうした武蔵や英治自身とは対

常に愛情を持って書いているの

です。

対談 松永武さん(右)と今川館長

内田吐夢監督は、撮影にあたり俳優、スタッフらを集め、五

年間、自分も含め皆で成長して

いこう、と呼びかけたと言いま

す。特に主演の中村錦之助はス

トイツな武蔵の芯をつかむこ

とで、役者としても大成しまし

ました。

また、お通を演じた入江若

と夫婦になります。しかし英治

は、子どもを抱えたこの夫婦の姿を「幸せ」として描いています。

これもまた人の幸せである、と。

こうした武蔵や英治自身とは対

常に愛情を持って書いているの

です。

講演録妙)

映画「宮本武蔵」上映会

平成24年6月17日(日)

関連イベントとして、映画「宮

本武蔵 嶩流島の決斗」(東映配給 昭和40年公開 内田吐夢監督／中村錦之助、高倉健主演)

葉は全くの新人でしたが、内田監督は、原作の吉川英治がお通に込めた息吹を感じ取り、女優としてではなく、人間本来の品

位で役に臨むことを求めたそ

です。入江もこれに応え、五部

作を通して年若い乙女から一人

の女人へと脱皮を遂げた、と松

永さんは評しました。

内田監督は鈴木尚也と共同で

脚本も担当しています。映画で

は武蔵が原作にはない「所詮、

剣は武器か」という有名な台詞

を喰きます。これは、旧満州で

戦争を体験し、戦の悲惨を目

覚めました。監督の思いが込め

てあります。同時に戦時下

の精神動員に利用されたとも言

う原作の吉川武蔵を戦後の映画

が相対化する言葉となりまし

た。

最後に、本作品で小次郎を演

す。

内田吐夢監督は、撮影にあた

り俳優、スタッフらを集め、五

年間、自分も含め皆で成長して

いこう、と呼びかけたと言いま

す。特に主演の中村錦之助はス

トイツな武蔵の芯をつかむこ

とで、役者としても大成しまし

ました。

また、お通を演じた入江若

と夫婦になります。しかし英治

は、子どもを抱えたこの夫婦の姿を「幸せ」として描いています。

これもまた人の幸せである、と。

こうした武蔵や英治自身とは対

常に愛情を持って書いているの

です。

講演録妙)

内田吐夢監督は、撮影にあた

り俳優、スタッフらを集め、五

年間、自分も含め皆で成長して

いこう、と呼びかけたと言いま

す。特に主演の中村錦之助はス

トイツな武蔵の芯をつかむこ

とで、役者としても大成しまし

ました。

また、お通を演じた入江若

と夫婦になります。しかし英治

は、子どもを抱えたこの夫婦の姿を「幸せ」として描いています。

これもまた人の幸せである、と。

こうした武蔵や英治自身とは対

常に愛情を持って書いているの

です。

講演録妙)

内田吐夢監督は、撮影にあた

り俳優、スタッフらを集め、五

年間、自分も含め皆で成長して

いこう、と呼びかけたと言いま

す。特に主演の中村錦之助はス

トイツな武蔵の芯をつかむこ

とで、役者としても大成しまし

ました。

また、お通を演じた入江若

と夫婦になります。しかし英治

は、子どもを抱えたこの夫婦の姿を「幸せ」として描いています。

これもまた人の幸せである、と。

こうした武蔵や英治自身とは対

常に愛情を持って書いているの

です。

講演録妙)

内田吐夢監督は、撮影にあた

り俳優、スタッフらを集め、五

年間、自分も含め皆で成長して

いこう、と呼びかけたと言いま

す。特に主演の中村錦之助はス

トイツな武蔵の芯をつかむこ

とで、役者としても大成しまし

ました。

また、お通を演じた入江若

と夫婦になります。しかし英治

は、子どもを抱えたこの夫婦の姿を「幸せ」として描いています。

これもまた人の幸せである、と。

こうした武蔵や英治自身とは対

常に愛情を持って書いているの

です。

講演録妙)

内田吐夢監督は、撮影にあた

り俳優、スタッフらを集め、五

年間、自分も含め皆で成長して

いこう、と呼びかけたと言いま

す。特に主演の中村錦之助はス

トイツな武蔵の芯をつかむこ

とで、役者としても大成しまし

ました。

また、お通を演じた入江若

と夫婦になります。しかし英治

は、子どもを抱えたこの夫婦の姿を「幸せ」として描いています。

これもまた人の幸せである、と。

こうした武蔵や英治自身とは対

常に愛情を持って書いているの

です。

講演録妙)

内田吐夢監督は、撮影にあた

り俳優、スタッフらを集め、五

年間、自分も含め皆で成長して

いこう、と呼びかけたと言いま

す。特に主演の中村錦之助はス

トイツな武蔵の芯をつかむこ

とで、役者としても大成しまし

ました。

また、お通を演じた入江若

と夫婦になります。しかし英治

は、子どもを抱えたこの夫婦の姿を「幸せ」として描いています。

これもまた人の幸せである、と。

こうした武蔵や英治自身とは対

常に愛情を持って書いているの

です。

講演録妙)

内田吐夢監督は、撮影にあた

り俳優、スタッフらを集め、五

年間、自分も含め皆で成長して

いこう、と呼びかけたと言いま

す。特に主演の中村錦之助はス

トイツな武蔵の芯をつかむこ

とで、役者としても大成しまし

ました。

また、お通を演じた入江若

と夫婦になります。しかし英治

は、子どもを抱えたこの夫婦の姿を「幸せ」として描いています。

これもまた人の幸せである、と。

こうした武蔵や英治自身とは対

常に愛情を持って書いているの

です。

講演録妙)

内田吐夢監督は、撮影にあた

り俳優、スタッフらを集め、五

年間、自分も含め皆で成長して

いこう、と呼びかけたと言いま

す。特に主演の中村錦之助はス

トイツな武蔵の芯をつかむこ

とで、役者としても大成しまし

ました。

また、お通を演じた入江若

と夫婦になります。しかし英治

は、子どもを抱えたこの夫婦の姿を「幸せ」として描いています。

これもまた人の幸せである、と。

こうした武蔵や英治自身とは対

常に愛情を持って書いているの

です。

講演録妙)

内田吐夢監督は、撮影にあた

り俳優、スタッフらを集め、五

年間、自分も含め皆で成長して

いこう、と呼びかけたと言いま

す。特に主演の中村錦之助はス

トイツな武蔵の芯をつかむこ

とで、役者としても大成しまし

ました。

また、お通を演じた入江若

と夫婦になります。しかし英治

は、子どもを抱えたこの夫婦の姿を「幸せ」として描いています。

これもまた人の幸せである、と。

こうした武蔵や英治自身とは対

常に愛情を持って書いているの

です。

講演録妙)

内田吐夢監督は、撮影にあたり俳優、スタッフらを集め、五

年間、自分も含め皆で成長して

いこう、と呼びかけたと言いま

す。特に主演の中村錦之助はス

トイツな武蔵の芯をつかむこ

とで、役者としても大成しまし

ました。

また、お通を演じた入江若

と夫婦になります。しかし英治

は、子どもを抱えたこの夫婦の姿を「幸せ」として描いています。

これもまた人の幸せである、と。

こうした武蔵や英治自身とは対

常に愛情を持って書いているの

です。

講演録妙)

内田吐夢監督は、撮影にあた

り俳優、スタッフらを集め、五

年間、自分も含め皆で成長して

いこう、と呼びかけたと言いま

す。特に主演の中村錦之助はス

トイツな武蔵の芯をつかむこ

とで、役者としても大成しまし

ました。

◆五味太郎作品展

[絵本の時間]

夏休み期間にあわせて、企画展「五味太郎作品展「絵本の時間」」を開催しました。

20年にわたり売れ続けるロングセラー。一つのことわざが見開きで構成され、右が従来どおりの解説、左が五味さんオリジナルのことわざになっています。こちらも親子で読みながら楽しむ様子が見られました。

五味太郎さんは、独創的な作品世界で幅広い世代から人気を集め、これまでに350冊を超える著書を出版、70タイトルを超える絵本が海外で翻訳出版され、高く評価されています。数多くの絵本のなかから、10作品およそ100点の絵本原画を展示しました。五味さんの絵本原画は九州初上陸。記念すべき展覧会となりました。

その他 ユーモアたっぷりの『だれでも知つてゐるあの有名なももたろう』や、穴あきしかけ絵本『まどからおくりもの』、たつた一音の組み合わせによつて物語が紡ぎだされる絵本『かかかか』や『ぼぼぼぼぼ』も大人気でした。

絵本五味太郎 50%】から5種類のイラストを選び、自由に絵を書きボードに貼つてもらいまし
た。五味さん顔負けのユーモア
いっぱいのイラストがたくさんできあがり、作品は6冊分の



展示室（絵本コーナー）

●展示

展示会場に入つて最初の作品は、代表作のひとつ『みんなうんち』の原画。人間も含めたいろいろな動物のいろいろなうんちが描かれます。来場者は、原画に対応した言葉を読みながら、五味ワールドを堪能していました。

映コーナーでは、五味さんのアーティストとしての一面を紹介。二メーションと制作風景を組み合わせたオリジナル映像を上映しました。絵本作りに取り組む五味さんの貴重な姿が見られました。

絵本五味太郎 50%】から5種類のイラストを選び、自由に絵を書きボードに貼つてもらいまし
た。五味さん顔負けのユーモア
いっぱいのイラストがたくさんできあがり、作品は6冊分の

●コ
ナ
ー

展示会場入り口横のビデオ上
映コーナーでは、五味さんのア

◆大人からは「子どもの頃読んだ絵本の原画を見ることができて嬉しかった」「カラーリングの鮮やかな色彩に感動した」などといった声を、子どもからは「絵もきれいで、お話を楽しかつた」などといった声をいただきました。

来館者の声

●展示

展示会場に入つて最初の作品

本原画を展示了。五味さんの絵本原画は九州初上陸。記念すべき展覧会となりました。カラーリングの発色の鮮やかさ、絶妙な筆づかいや色の組み合わせなど、原画ならではの魅力をご覧いただきました。

その他 ユーモアたっぷりの『だれでも知つてゐるあの有名なももたろう』や、穴あきしかけ絵本『まどからおくりもの』、たつた一音の組み合わせによつて物語が紡ぎだされる絵本『かかかか』や『ぼぼぼぼぼ』も大人気でした。

穂積保さん
ギャラリー

今回の作品展に企画協力をいただき、また五味太郎さんとともに親交の深い穂積保さん（株式会

「大人」と「問題」の間には、「は・が・の」が入ります。大人は、自分が・の」が入ります。大人は、自分
分の先入観で知らず知らずのうちに子どもに押しつけていることが多いので、少し立ち止まつて考えるきっかけになるお勧めの一冊とのことでした。

社メディアリンクス・ジャパン
代表取締役社長、非営利団体「こ
どもの本WAVE」代表)をお招
きし、ギャラリートークを行い
ました。五味さんと長いお付き
合いのある穂積さんならではの
エピソードを交え、人柄や作品
についてお話ししていただきまし

展示解説では、五味さんの絵本を海外へ売り込んだ折のエピソードをおうかがいできました。なかでも、『みんなうんち』をアメリカで出版しようと奔走した話に、参加者も聞き入っていました。この作品は今でこそ代表作の一つに挙げられますぐ

穂積さんが五味さんと出会ったのは、出版社（福音館書店）編集部時代。五味さんは1973年、27歳のとき『みち』（「かがくのもと50号」福音館書店）で絵本作家としてデビューしていました。

「うんち」を絵本のテーマに取り上げることに対し、日本での出版時にも賛否両論があつたそうです。アメリカでも多くの大手出版社に断られ、ようやく小さな出版社の社長が作品を気に入り、出版。ふたを開けてみれば7週間で36万部のベストセラーとなり、大ヒットだつたそうです。大人が創り上げた子ども像

穂積さんが五味さんと出会つたのは、出版社(福音館書店)編集部時代。五味さんは1973年、27歳のとき『みち』(かがくのもと50号)福音館書店で絵本作家としてデビューしていま

「うんち」を絵本のテーマに取り上げることに対する、日本での出版時にも賛否両論があつたそうです。アメリカでも多くの大手出版社に断られ、ようやく小さな出版社の社長が作品を気に入り、出版。ふたを開けてみれば

穂積さんが五味さんと出会ったのは、出版社（福音館書店）編集部時代。五味さんは1973年、27歳のとき『みち』（「かがくのもと50号」福音館書店）で絵本作家としてデビューしていました。

「うんち」を絵本のテーマに取り上げることに対し、日本での出版時にも賛否両論があつたそうです。アメリカでも多くの大手出版社に断られ、ようやく小さな出版社の社長が作品を気に入り、出版。ふたを開けてみれば7週間で36万部のベストセラーとなり、大ヒットだつたそうです。大人が創り上げた子ども像

に対して先入観を持たない、五味さんの人柄がよく表れた作品のひとつです。

「○○が逃げた?」

カラーリングで絵本を作ろう!



かり、予定していた2時間の制作時間はオーバーしましたが、皆さん、世界にたつた一冊の絵本を完成させました。

五味太郎さんの原画でも使われる、カラーリングを使った絵本作りのイベント(全4回)を開催しました。240名あまりの応募があり、抽選で各回20名ずつ、あわせて80名の参加者が絵本作りに挑戦しました。講師は、原賀いずみさんと北九州インタークリエーション研究会の皆さんです。

始めに、絵本を作るための手順とカラーリングの使い方の説明を受けました。五味太郎さんの代表作のひとつ『きんぎょがにげた』を参考に、「○○がにげた」と題して、自分たちでお話を考えます。心に浮かんだ動物、食べ物などがいろいろな場所に逃げて、最後にはもとの場所に戻ってきます。五味さんは、アイデアを考える時に「頭がいたずらする」(『絵本を作る』より)という表現を使いますが、原賀さんもその言葉を紹介し「何がどこに逃げても自由。ぜつたいに行かないような場所を想像してみて」と参加者に呼びかけます。

虹の中に逃げて虹色になつたカメレオンや、ロケットで宇宙まで飛んで行つたスイカなど、子どもたちの想像力に、先生たちも脱帽。つきそつた保護者が、横で絵本作りをサポートする姿もみられました。カラーリングで絵本作りを予想以上に手間がかかります。



親子で絵本づくり

下書きが完成したら、いよいよカラーリングを使います。カラーリングの特徴は鮮やかな発色。そのため、「きれいな色を出すためには2色以上混ぜないで」とアドバイスを受けました。全8色のカラーリングで、思い

には、家で飼っているペットが逃げたという設定にした子もいました。からは次々にアイデアが。なかには、家で飼っているペットが逃げたという設定にした子もいました。

護者からは、「親も子も楽しめた」「絵本を作るのは初めてで新鮮だった」「絵本が身近に感じられるようになつた」などの嬉しい声をいただきました。

絵本作りをとおして五味太郎さんの世界を感じ、親子で楽しんでいただけの賑やかなイベントとなりました。

◎森のおはなし会さん
たくさん紹介していただきたなかで、特に『きんぎょがにげた』は大人気の一冊。ページをめくると、金魚がいろいろな場所に隠れています。金魚を見つけるようと、子どもたちは大はしゃぎでした。また、絵本だけでなく歌も紹介。五味さんが作詞を手がけた「ぼくのミックスジュース」の歌が流れると、「幼稚園で習つて知つてる」などの声があがりました。みんなで一緒に歌い、楽しい時間になりました。

◎ムーミンさん
リコーダーの演奏や手遊び、パネルシアターなどを取り入れて、賑やかな会になりました。「かえるくんにきをつけ」など多くのキャラクターがかわいらしく、くるりんにきをつけ」などくり出します。子どもたちも「くじらはどこにいるのかな」と不思議そう。空の上からみた海がくじらのかたちだったというエンディングに、歓声があがりました。夏らしい絵本をご紹介いただきました。

五味さんの絵本の魅力と同時に、絵本を読む楽しさを味わうことができた読み聞かせ会とな

絵本のよみきかせ



絵本のよみきかせ会

した。森のおはなし会、ムーミン、ひなたぼっこ3グループが交代で行い、会場は毎回子どもたちの笑い声に包まれました。

◎森のおはなし会さん
たくさん紹介していただきたなかで、特に『きんぎょがにげた』は大人気の一冊。ページをめくると、金魚がいろいろな場所に隠れています。金魚を見つけるようと、子どもたちは大はしゃぎでした。また、絵本だけでなく歌も紹介。五味さんが作詞を手がけた「ぼくのミックスジュース」の歌が流れると、「幼稚園で習つて知つてる」などの声があがりました。みんなで一緒に歌い、楽しい時間になりました。

◎ムーミンさん
リコーダーの演奏や手遊び、パネルシアターなどを取り入れて、賑やかな会になりました。「かえるくんにきをつけ」など

くり出します。子どもたちも「くじらはどこにいるのかな」と不思議そう。空の上からみた海がくじらのかたちだったというエンディングに、歓声があがりました。夏らしい絵本をご紹介いただきました。

五味さんの絵本の魅力と同時に、絵本を読む楽しさを味わう

ことができた読み聞かせ会とな

りました。

働き、書いた——北九州の職場雑誌展

北九州地域のさまざまな職場からは雑誌が刊行され、そこには文芸が息づいていました。文学館では職場雑誌の展示を通じ、北九州という場で生まれた職場雑誌文化の足跡を、文芸を中心に辿ってゆきます。働く人々が生み出した言葉たちにふれ、耳を傾けること――それが今日の北九州における、文芸文化のルーツを考える機会になることを願つて。

*会期	
平成24年10月20日(土)	松原新一先生さん(久留米大学名誉教授)
～平成25年2月11日(月・祝)	演題：「戦後」という時代の空気
月曜日、年末年始(12月29日～1月3日)休館。12月24日、1月14日、2月11日は開館、翌日休館。	～1950～60年代の職場雑誌の位相について――
	○佐木隆三名誉館長講演会
	11月23日(金・祝)
	映画「この天の虹」上映会
	1月22日(火)
	映画「門鉄文化」と「製鉄文化」
	○映画上映会・鼎談
	1月22日(火)
	映画「この天の虹」上映会
	1958年 松竹 木下恵介監督 出演：久我美子、川津祐介ほか
	鼎談 山下敏克さん(創作研究会)
	「周炎」編集長、菅和彦さん(新日本鐵住金㈱八幡製鐵所開発企画室主査)、今川英子(北九州市立文学館館長)
*内容	
序	職場雑誌ことはじめ
	職場雑誌とはなにか
	作家たちと職場雑誌
	職場雑誌の黎明
	職場雑誌と労働運動
二	占領下の職場雑誌
	GHOと「ランゲ文庫
	そして、レッドページ
三	職場雑誌の隆盛
	経済成長と職場雑誌文芸
	結 職場雑誌のいま
	職場雑誌の文化運動
	経済成長と職場雑誌文芸
	*イベント
◎開会記念講演	10月20日(土)
/発行責任者	

◎資料寄贈者・提供者	
受贈雑誌一覧 (平成24年8月現在)	
青森県近代文学館	赤磐市教育委員会熊山分室
赤とんぼ	赤星千鶴子 秋吉
久紀夫 椅桿書院 麻生壽々	水上平吉 宮本一宏 森鷗外記念会 柳生じゅん子
代 天川悦子 安間隆次 家	Wnde 増田連 松岡皓二
原文昭 市川市文学プラザ	松本清張記念館
市場えつ子 今本善之助	松本洋一
野伸子 岩橋邦枝 江戸東京	山本栄子 ラーシュ・ヴァリエ
博物館 大岡信ことば館	井筒屋
川内夏樹 大佛次郎記念館	モレール 平和通
岡田功 岡山デジタルミュージアム	モレール 旦過
会 かごしま近代文学館 柏	タラタ 小さい旗 天籟通信
	菜殻火 虹野 日曜作家 俳句ひろば 北九州 ふだんぎ
	岸 沙漠 七曜 自鳴鐘 周文 群炎 月刊俳句界 月刊
	おりやま文学の森資料館 後藤みな子 さいたま文学館 克彦 高知県立文学館 こ
	野穂波 北九州文化連盟 加納孝子 鎌倉文学館 沢田文武 黒岩 淳 現代詩歌文学館 興膳
	ね吟社主幹、折世凡樹さん(八幡製鐵所広報部OB)
	柴田遼壱 新宿区地域文化協議会事務局 船団の会
	宗香 曽根洋子 高山市生涯学習課 田中輝子 谷さ
	徳島県立文学書道館 長塚 やん 千々和昭男 恒成美
	ひふみ 野村正 梅光学院 節研究会 中原弘 野見山
	波佐間義之 羽毛田弘志 林田義行 林福江 葉山修
	平姫路文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	Wnde 増田連 松岡皓二
	ふくやま文学館 Beate
	ふくやま文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	水上平吉 宮本一宏 森鷗外記念会 柳生じゅん子
	Wnde 増田連 松岡皓二
	井筒屋
	モレール 平和通
	モレール 旦過
	タラタ 小さい旗 天籟通信
	菜殻火 虹野 日曜作家 俳句ひろば 北九州 ふだんぎ
	岸 沙漠 七曜 自鳴鐘 周文 群炎 月刊俳句界 月刊
	おりやま文学の森資料館 後藤みな子 さいたま文学館 克彦 高知県立文学館 こ
	野穂波 北九州文化連盟 加納孝子 鎌倉文学館 沢田文武 黒岩 淳 現代詩歌文学館 興膳
	ね吟社主幹、折世凡樹さん(八幡製鐵所広報部OB)
	柴田遼壱 新宿区地域文化協議会事務局 船団の会
	宗香 曾根洋子 高山市生涯学習課 田中輝子 谷さ
	徳島県立文学書道館 長塚 やん 千々和昭男 恒成美
	ひふみ 野村正 梅光学院 節研究会 中原弘 野見山
	波佐間義之 羽毛田弘志 林田義行 林福江 葉山修
	平姫路文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	Wnde 増田連 松岡皓二
	ふくやま文学館 Beate
	ふくやま文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	水上平吉 宮本一宏 森鷗外記念会 柳生じゅん子
	Wnde 増田連 松岡皓二
	井筒屋
	モレール 平和通
	モレール 旦過
	タラタ 小さい旗 天籟通信
	菜殻火 虹野 日曜作家 俳句ひろば 北九州 ふだんぎ
	岸 沙漠 七曜 自鳴鐘 周文 群炎 月刊俳句界 月刊
	おりやま文学の森資料館 後藤みな子 さいたま文学館 克彦 高知県立文学館 こ
	野穂波 北九州文化連盟 加納孝子 鎌倉文学館 沢田文武 黒岩 淳 現代詩歌文学館 興膳
	ね吟社主幹、折世凡樹さん(八幡製鐵所広報部OB)
	柴田遼壱 新宿区地域文化協議会事務局 船団の会
	宗香 曾根洋子 高山市生涯学習課 田中輝子 谷さ
	徳島県立文学書道館 長塚 やん 千々和昭男 恒成美
	ひふみ 野村正 梅光学院 節研究会 中原弘 野見山
	波佐間義之 羽毛田弘志 林田義行 林福江 葉山修
	平姫路文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	Wnde 増田連 松岡皓二
	ふくやま文学館 Beate
	ふくやま文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	水上平吉 宮本一宏 森鷗外記念会 柳生じゅん子
	Wnde 増田連 松岡皓二
	井筒屋
	モレール 平和通
	モレール 旦過
	タラタ 小さい旗 天籟通信
	菜殻火 虹野 日曜作家 俳句ひろば 北九州 ふだんぎ
	岸 沙漠 七曜 自鳴鐘 周文 群炎 月刊俳句界 月刊
	おりやま文学の森資料館 後藤みな子 さいたま文学館 克彦 高知県立文学館 こ
	野穂波 北九州文化連盟 加納孝子 鎌倉文学館 沢田文武 黒岩 淳 現代詩歌文学館 興膳
	ね吟社主幹、折世凡樹さん(八幡製鐵所広報部OB)
	柴田遼壱 新宿区地域文化協議会事務局 船団の会
	宗香 曾根洋子 高山市生涯学習課 田中輝子 谷さ
	徳島県立文学書道館 長塚 やん 千々和昭男 恒成美
	ひふみ 野村正 梅光学院 節研究会 中原弘 野見山
	波佐間義之 羽毛田弘志 林田義行 林福江 葉山修
	平姫路文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	Wnde 増田連 松岡皓二
	ふくやま文学館 Beate
	ふくやま文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	水上平吉 宮本一宏 森鷗外記念会 柳生じゅん子
	Wnde 増田連 松岡皓二
	井筒屋
	モレール 平和通
	モレール 旦過
	タラタ 小さい旗 天籟通信
	菜殻火 虹野 日曜作家 俳句ひろば 北九州 ふだんぎ
	岸 沙漠 七曜 自鳴鐘 周文 群炎 月刊俳句界 月刊
	おりやま文学の森資料館 後藤みな子 さいたま文学館 克彦 高知県立文学館 こ
	野穂波 北九州文化連盟 加納孝子 鎌倉文学館 沢田文武 黒岩 淳 現代詩歌文学館 興膳
	ね吟社主幹、折世凡樹さん(八幡製鐵所広報部OB)
	柴田遼壱 新宿区地域文化協議会事務局 船団の会
	宗香 曾根洋子 高山市生涯学習課 田中輝子 谷さ
	徳島県立文学書道館 長塚 やん 千々和昭男 恒成美
	ひふみ 野村正 梅光学院 節研究会 中原弘 野見山
	波佐間義之 羽毛田弘志 林田義行 林福江 葉山修
	平姫路文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	Wnde 増田連 松岡皓二
	ふくやま文学館 Beate
	ふくやま文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	水上平吉 宮本一宏 森鷗外記念会 柳生じゅん子
	Wnde 増田連 松岡皓二
	井筒屋
	モレール 平和通
	モレール 旦過
	タラタ 小さい旗 天籟通信
	菜殻火 虹野 日曜作家 俳句ひろば 北九州 ふだんぎ
	岸 沙漠 七曜 自鳴鐘 周文 群炎 月刊俳句界 月刊
	おりやま文学の森資料館 後藤みな子 さいたま文学館 克彦 高知県立文学館 こ
	野穂波 北九州文化連盟 加納孝子 鎌倉文学館 沢田文武 黒岩 淳 現代詩歌文学館 興膳
	ね吟社主幹、折世凡樹さん(八幡製鐵所広報部OB)
	柴田遼壱 新宿区地域文化協議会事務局 船団の会
	宗香 曾根洋子 高山市生涯学習課 田中輝子 谷さ
	徳島県立文学書道館 長塚 やん 千々和昭男 恒成美
	ひふみ 野村正 梅光学院 節研究会 中原弘 野見山
	波佐間義之 羽毛田弘志 林田義行 林福江 葉山修
	平姫路文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	Wnde 増田連 松岡皓二
	ふくやま文学館 Beate
	ふくやま文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	水上平吉 宮本一宏 森鷗外記念会 柳生じゅん子
	Wnde 増田連 松岡皓二
	井筒屋
	モレール 平和通
	モレール 旦過
	タラタ 小さい旗 天籟通信
	菜殻火 虹野 日曜作家 俳句ひろば 北九州 ふだんぎ
	岸 沙漠 七曜 自鳴鐘 周文 群炎 月刊俳句界 月刊
	おりやま文学の森資料館 後藤みな子 さいたま文学館 克彦 高知県立文学館 こ
	野穂波 北九州文化連盟 加納孝子 鎌倉文学館 沢田文武 黒岩 淳 現代詩歌文学館 興膳
	ね吟社主幹、折世凡樹さん(八幡製鐵所広報部OB)
	柴田遼壱 新宿区地域文化協議会事務局 船団の会
	宗香 曾根洋子 高山市生涯学習課 田中輝子 谷さ
	徳島県立文学書道館 長塚 やん 千々和昭男 恒成美
	ひふみ 野村正 梅光学院 節研究会 中原弘 野見山
	波佐間義之 羽毛田弘志 林田義行 林福江 葉山修
	平姫路文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	Wnde 増田連 松岡皓二
	ふくやま文学館 Beate
	ふくやま文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	水上平吉 宮本一宏 森鷗外記念会 柳生じゅん子
	Wnde 増田連 松岡皓二
	井筒屋
	モレール 平和通
	モレール 旦過
	タラタ 小さい旗 天籟通信
	菜殻火 虹野 日曜作家 俳句ひろば 北九州 ふだんぎ
	岸 沙漠 七曜 自鳴鐘 周文 群炎 月刊俳句界 月刊
	おりやま文学の森資料館 後藤みな子 さいたま文学館 克彦 高知県立文学館 こ
	野穂波 北九州文化連盟 加納孝子 鎌倉文学館 沢田文武 黒岩 淳 現代詩歌文学館 興膳
	ね吟社主幹、折世凡樹さん(八幡製鐵所広報部OB)
	柴田遼壱 新宿区地域文化協議会事務局 船団の会
	宗香 曾根洋子 高山市生涯学習課 田中輝子 谷さ
	徳島県立文学書道館 長塚 やん 千々和昭男 恒成美
	ひふみ 野村正 梅光学院 節研究会 中原弘 野見山
	波佐間義之 羽毛田弘志 林田義行 林福江 葉山修
	平姫路文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	Wnde 増田連 松岡皓二
	ふくやま文学館 Beate
	ふくやま文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	水上平吉 宮本一宏 森鷗外記念会 柳生じゅん子
	Wnde 増田連 松岡皓二
	井筒屋
	モレール 平和通
	モレール 旦過
	タラタ 小さい旗 天籟通信
	菜殻火 虹野 日曜作家 俳句ひろば 北九州 ふだんぎ
	岸 沙漠 七曜 自鳴鐘 周文 群炎 月刊俳句界 月刊
	おりやま文学の森資料館 後藤みな子 さいたま文学館 克彦 高知県立文学館 こ
	野穂波 北九州文化連盟 加納孝子 鎌倉文学館 沢田文武 黒岩 淳 現代詩歌文学館 興膳
	ね吟社主幹、折世凡樹さん(八幡製鐵所広報部OB)
	柴田遼壱 新宿区地域文化協議会事務局 船団の会
	宗香 曾根洋子 高山市生涯学習課 田中輝子 谷さ
	徳島県立文学書道館 長塚 やん 千々和昭男 恒成美
	ひふみ 野村正 梅光学院 節研究会 中原弘 野見山
	波佐間義之 羽毛田弘志 林田義行 林福江 葉山修
	平姫路文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	Wnde 増田連 松岡皓二
	ふくやま文学館 Beate
	ふくやま文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	水上平吉 宮本一宏 森鷗外記念会 柳生じゅん子
	Wnde 増田連 松岡皓二
	井筒屋
	モレール 平和通
	モレール 旦過
	タラタ 小さい旗 天籟通信
	菜殻火 虹野 日曜作家 俳句ひろば 北九州 ふだんぎ
	岸 沙漠 七曜 自鳴鐘 周文 群炎 月刊俳句界 月刊
	おりやま文学の森資料館 後藤みな子 さいたま文学館 克彦 高知県立文学館 こ
	野穂波 北九州文化連盟 加納孝子 鎌倉文学館 沢田文武 黒岩 淳 現代詩歌文学館 興膳
	ね吟社主幹、折世凡樹さん(八幡製鐵所広報部OB)
	柴田遼壱 新宿区地域文化協議会事務局 船団の会
	宗香 曾根洋子 高山市生涯学習課 田中輝子 谷さ
	徳島県立文学書道館 長塚 やん 千々和昭男 恒成美
	ひふみ 野村正 梅光学院 節研究会 中原弘 野見山
	波佐間義之 羽毛田弘志 林田義行 林福江 葉山修
	平姫路文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	Wnde 増田連 松岡皓二
	ふくやま文学館 Beate
	ふくやま文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	水上平吉 宮本一宏 森鷗外記念会 柳生じゅん子
	Wnde 増田連 松岡皓二
	井筒屋
	モレール 平和通
	モレール 旦過
	タラタ 小さい旗 天籟通信
	菜殻火 虹野 日曜作家 俳句ひろば 北九州 ふだんぎ
	岸 沙漠 七曜 自鳴鐘 周文 群炎 月刊俳句界 月刊
	おりやま文学の森資料館 後藤みな子 さいたま文学館 克彦 高知県立文学館 こ
	野穂波 北九州文化連盟 加納孝子 鎌倉文学館 沢田文武 黒岩 淳 現代詩歌文学館 興膳
	ね吟社主幹、折世凡樹さん(八幡製鐵所広報部OB)
	柴田遼壱 新宿区地域文化協議会事務局 船団の会
	宗香 曾根洋子 高山市生涯学習課 田中輝子 谷さ
	徳島県立文学書道館 長塚 やん 千々和昭男 恒成美
	ひふみ 野村正 梅光学院 節研究会 中原弘 野見山
	波佐間義之 羽毛田弘志 林田義行 林福江 葉山修
	平姫路文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	Wnde 増田連 松岡皓二
	ふくやま文学館 Beate
	ふくやま文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	水上平吉 宮本一宏 森鷗外記念会 柳生じゅん子
	Wnde 増田連 松岡皓二
	井筒屋
	モレール 平和通
	モレール 旦過
	タラタ 小さい旗 天籟通信
	菜殻火 虹野 日曜作家 俳句ひろば 北九州 ふだんぎ
	岸 沙漠 七曜 自鳴鐘 周文 群炎 月刊俳句界 月刊
	おりやま文学の森資料館 後藤みな子 さいたま文学館 克彦 高知県立文学館 こ
	野穂波 北九州文化連盟 加納孝子 鎌倉文学館 沢田文武 黒岩 淳 現代詩歌文学館 興膳
	ね吟社主幹、折世凡樹さん(八幡製鐵所広報部OB)
	柴田遼壱 新宿区地域文化協議会事務局 船団の会
	宗香 曾根洋子 高山市生涯学習課 田中輝子 谷さ
	徳島県立文学書道館 長塚 やん 千々和昭男 恒成美
	ひふみ 野村正 梅光学院 節研究会 中原弘 野見山
	波佐間義之 羽毛田弘志 林田義行 林福江 葉山修
	平姫路文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	Wnde 増田連 松岡皓二
	ふくやま文学館 Beate
	ふくやま文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	水上平吉 宮本一宏 森鷗外記念会 柳生じゅん子
	Wnde 増田連 松岡皓二
	井筒屋
	モレール 平和通
	モレール 旦過
	タラタ 小さい旗 天籟通信
	菜殻火 虹野 日曜作家 俳句ひろば 北九州 ふだんぎ
	岸 沙漠 七曜 自鳴鐘 周文 群炎 月刊俳句界 月刊
	おりやま文学の森資料館 後藤みな子 さいたま文学館 克彦 高知県立文学館 こ
	野穂波 北九州文化連盟 加納孝子 鎌倉文学館 沢田文武 黒岩 淳 現代詩歌文学館 興膳
	ね吟社主幹、折世凡樹さん(八幡製鐵所広報部OB)
	柴田遼壱 新宿区地域文化協議会事務局 船団の会
	宗香 曾根洋子 高山市生涯学習課 田中輝子 谷さ
	徳島県立文学書道館 長塚 やん 千々和昭男 恒成美
	ひふみ 野村正 梅光学院 節研究会 中原弘 野見山
	波佐間義之 羽毛田弘志 林田義行 林福江 葉山修
	平姫路文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	Wnde 増田連 松岡皓二
	ふくやま文学館 Beate
	ふくやま文学館ひらがな しゅつばん 福岡市文学館
	水上平吉 宮本一宏 森鷗外記念会 柳生じゅん子
	Wnde 増田連 松岡皓二
	井筒屋
	モレール 平和通
	モレール 旦過
	タラタ 小さい旗 天籟通信
	菜殻火 虹野 日曜作家 俳句ひろば 北九州 ふだんぎ
	岸 沙漠 七曜 自鳴鐘 周文 群炎 月刊俳句界 月刊
	おりやま文学の森資料館 後藤みな子 さいたま文学館 克彦 高知県立文学館 こ
	野穂波 北九州文化連盟 加納孝子 鎌倉文学館 沢田文武 黒岩 淳 現代詩歌文学館 興膳
	ね吟社主幹、折世凡樹さん(八幡製鐵所広報部OB)
	柴田遼壱 新宿区地域文化協議会事務局 船団の会
	宗香 曾根洋子 高山市生涯学習課 田中輝子 谷さ
	徳島県立文学書道館 長塚 やん 千々和昭男 恒成美
	ひふみ 野村正 梅光学院 節研究会 中原弘 野見山
	波佐間義之 羽毛田弘